

迫られる情報開示

客観的に医療機関を「選ぶ」時代がやって来た！



▽これからは患者が病院を「選ぶ」時代

今年3月、大阪府は府内10か所のガン病院の施設別、疾病別、患者年齢などを調整したうえの、5年相対生存率を公開。その実績に大きな格差があることが判明し、各方面から反響を呼びました。

大阪府は医療情報の公開に積極的で、インターネットで府内の診療所、病院の情報が検索できる「医療機関情報システム」もオープン。誰もが気軽に医療情報を取って、選べるよう努めています。

一方、鳥取県立中央病院もホームページで、診療科ごとに過去5年間の治療実績を公開。具体的には各種手術の実施件数などが載せられ、心臓手術などの死亡数や5年後の生存率も公開データに含まれているとのこと。

「確かに大阪府の取り組みは、これまで一般に届くことなかった治療実績を公開したという点では評価できると思います」と話すのは、医療ジャーナリストの伊藤隼也さん。これまでは、治療実績など、こつこつとした情報は医療機関内で伝わるだけで、分かりやすく世間に公表する習慣は日本にはなかったというのです。

「でもそれも戦後50年、日本では医療側と患者側に、圧倒的な情報の不均衡がありました。ところがここ4～5年、度重なる医療事故を目の当たりにした医療消費者を中心に、情報開示を求める声が高ま

ってきたのです」



情報の開示が求められる医療機関。患者が客観的なデータをもとに病院を選ぶ時代が来ている

ってきたのです」

ディスクロージャーという点で日本は未成熟の国。特に医療部門において、その内情は深いベールに包まれています。ところが欧米諸国の多くは、病院なら手術の実績、症例などの成績の情報開示は公的な義務。自分自身の命を預けるにも関わらず、相手のことを何も知らないとは、よく考えると恐ろしい話。私たちはもっと積極的に、医療機関について理解し、知る必要があります。

客観的なデータにこそ信頼性がある

「日本人の多くはこれまで、『医者』のすること間違いはない」と自分の体を疑いなく委ねてきました。ですから、今日の医療情報の

不透明は患者側の責任でもあるのです。服や車を選ぶのには熱心なのに、こと生命には無頓着。これでは、あまりにも無責任です」

私たちに、医療情報を元に自分で医療機関を「選ぶ」姿勢が求められるのです。

そこで伊藤さんは、良質な医療機関選びの3原則を提示。それが、①インフォームド・コンセント、②セカンド・オピニオン、③情報開示。この3つが徹底され、加えて透明性や説明責任が確保されているのが基本といえます。

一方、最近では多くの雑誌などで名医、良質な病院を紹介していますが、「ここから適切な医療機関を探る方法はあるのでしょうか？」

「重要なのは、疾病別の詳細な症例数など、客観的な指標をもって評価しているかどうか。〇〇さ

んが進める名医』では主観的で評価の対象になりません。私は『患者力』と呼んでいます。たとえば診療満足力、緊急対応力など客観的なデータを読み解き、そこから自分が求める医療機関を見つけ出すことが大切です」

今後、公的な医療情報の公開を求めるのはもちろん、私たちも責任を持って医療機関を選ぶ必要があります。繰り返しますが、医療機関は自分の将来や生命を左右する場所。自分の命は自分で守るしかないのです。

患者力 選ぶ病院

伊藤隼也
医療ジャーナリスト、写真家。
近著に『患者力』で選ぶいい病院（扶桑社）がある。

【病院の情報開示】

今年3月、大阪府は全国に先駆けて府内10か所のガン病院の施設別、疾病別（5種類のガン）、患者年齢などをもとに生存率の情報を開示した。大阪府では他にもインターネット上で府内の約1万2500の診療所、577の病院すべてが検索できる「医療機関情報システム」を公開。患者が自分に合った病院を検索できるシステム作りが注力している。また、鳥取県立中央病院もホームページで、診療科ごとの過去5年間の治療実績を公開している。近年は医療機関の情報開示を求める声が多く、これらはその要望に沿った形。しかしながら、厚生労働省によるとホームページに治療実績を載せている医療機関は全体の約1%。さらなる情報開示が求められる